式　辞

正門から続くケヤキ並木の冬芽に、膨らみを感じる季節になりました。春の到来です。そして今日ご来賓の方のご臨席のもとに、学部卒業生･大学院修了生、併せて 252 名の皆さんの門出をお祝いできますことは、教職員一同の最も喜びとするところです。ご卒業、おめでとうございます。さらに、しっかりと皆さんを支え、今日のこの晴れの日を共に迎えていらっしゃる保護者の皆様方にも、心よりお祝いを申し上げたいと思います。おめでとうございます。

皆さんは、今まさに社会へ漕ぎ出す港に立っています。目の前にある海の波は、決して穏やかなときばかりではありません。しかし、このキャンパスで培われた人間力を基礎に、持てる力を発揮し、航海に挑んでください。

さて、航海を乗り切るために、今ここでしっかりと心に刻んで欲しいことがあります。それは、今までも、そしてこれからも、若い皆さんが何度か経験するであろう苦しみや、絶望への対応についてです。大学での最後の講義として聞いてください。

私が、高校時代に学んだ国語の教科書で、今でも印象に残っているフレーズがあります。亀井勝一郎の「愛の無常について」の中にあった「絶望とは生まれ変わるための陣痛」という言葉です。青春の満ち溢れるエネルギーは、大きな夢を心に抱かせ、解決しがたい問題に真正面からぶつかるように自分を導きます。しかし、とてつもない越えがたい壁に前を塞がれている自分を認識したときに人は絶望を感じます。そのようなときこそ、人間は絶望しながら、自己を形成する生き物であるということを強く意識してください。周りが見えない塞がれた雲の中にいる自分であっても、雲を這い上がると、そこには太陽が降り注ぐ世界があるはずだと信じてください。諦めずに壁を乗り越えたときには、必ずや新たな自分に成長していることを実感できるはずです。

さらに、こうした苦悩や絶望と向かい合う自分を生涯支えるものとして、心理学分野では自己同一性の確立が大切であることを説いています。分かり易くいえば、自分の中に、精神的に心豊かになれる専門性を持ちなさいということですが、専門性とはかならずしも仕事に係わることばかりではありません。スポーツや音楽などの趣味や特技なども含めた、人生に意気を感じて過ごせるものを自分の中にしっかりと確立しなさいということです。

障害をかかえ、壮絶ないじめにあいつつも、好きな俳句によって耐え抜いている小学生を紹介します。小林凜君です。「ランドセル俳人の 5、7、5」という本を出版して今やベストセラーにもなっていますので、ご存じの方も多いと思います。針仕事をしている優しい祖母のかたわらで針箱の整理をして手伝って

いる凜君、いじめられても言葉に出さずじっと小さな胸で耐えている孫に対して不憫に思い、つい、「凜、産まれてきて幸せ？」という問いを発してしまいました。凜君は「それお母さんにも聞かれたことがあるよ。」と答え、沈黙の後、次の一句を詠みあげました。「生まれしを、幸せかと聞かれ春の宵」。クラスの子から、ひどいいじめを受けてきましたが、彼の心は、俳句を介して自然を包み込むまで育っています。「紅葉で神が染めたる天地かな」このスケールの大きな俳句は、朝日俳壇に選択 10 首として入選した句の一つです。

趣味の世界であっても、心打ち込む世界には、多くの支え合う仲間が生まれ、生きていく上での心強い味方になることも知って欲しいと思います。凜君の場合も、俳句ができると一緒にダンスを踊る暖かい祖母と母、彼の俳句を愛し、今不登校である彼に寄り添っている通信学級の先生、俳壇の選者であり、彼を励まし続けている長谷川櫂先生、こうした人達からの支えは、彼が自分を肯定して生きる上での力強い礎となっているに違いありません。

お話をまとめます。「絶望とは生まれ変わるための陣痛」この亀井勝一郎の言葉を絶えず心の隅に用意しておくこと。そして、趣味であっても良い、自分の心を豊かにする何かをしっかりと自分の中に培うこと、これらは必ずや人生という航海を乗り切る上で皆さんの強い支えになりますということが結論です。

これで最後の講義は終わりました。さあいよいよ出航です。人間文化学、経営情報学分野から巣立つ学部生、そして大学院生の皆さんが活躍する舞台は、この国のそして世界中のいたるところに準備されています。胸を張り、深呼吸して未知なる未来へと自信を持って漕ぎ出してください。皆さんの航海を大学は期待し、いつまでも見守っていくことをお約束して、卒業式の言葉を閉じたいと思います。

Von Voyage!

平成 26 年 3 月 19 日

県立広島大学　学長　中村　健一